

---

# Wall Kill All

倫敦蹴球愛好会

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Wall Kill All

### 【Nコード】

N1834F

### 【作者名】

倫敦蹴球愛好会

### 【あらすじ】

ちっこくて可愛いけど、最凶な先輩。美人で聡明だけど、非道な楠さん。そして、ただただ振り回される俺。とんでも無い状況から、いきなり物語は始まる。

## 第1話 ウォール キル オール（前書き）

基本的にコメディ路線ですが、若干残酷な描写があります。

## 第1話 ウォール キル オール

「ごめん。本当にごめん。」

決つてね悪気があつた訳じゃないんだよ。

本当だよ、信じて。神様に誓ってもいいよ。

あ、でも私つて神様信じて無いんだつた。

そつだ、なんだつたら隣の家の猫のミイヤちゃんに誓ってもいいよ。それが駄目なら、私が大好きな、めんたいこチップスに誓ってもいいよ。

とにかく私が悪いんじゃないんだよ。

これはね、あれよあれ。あれなのよ、あれ！

えーと、事故だよ！そう事故なんだよ！

偶発的に突発的に起こつてしまつた事故だよ！

運命的に輪廻的に不運的に起こつてしまつた事故なんだつてば！」

長い髪を振り乱し、小さな体全体を使って、彼女は愛くるしく必死にあやまっていた。

確か彼女は俺より1つ年上のはずだが、そのしぐさや言動は見ているとまるで小動物を思わせるような可愛いらしさだ。

こんな状況でなかったら、俺はコロリと彼女に一目惚れしたかもしれない。

「それで？」

それに対して楠さんは、びっくりするくらい冷淡な声だつた。

楠さんの赤いフレームの眼鏡のレンズが、ギラリと鈍く光る。

短くバッサリと切つた前髪を髪留めで止めておでこを出している顔は、利発そうでいて意思の強そうな顔立ちだ。

いまはその顔が能面のように無表情で、えも言われぬ迫力を醸し出している。

俺はと言えば

今のこの状況が理解できずに、ただただ立ち尽くしている。

この状況で、これだけ冷淡でいられる楠さんは、それはそれで凄い事の気がする。

楠さんは無表情なまま、口だけを動かしてもう一度聞いた。  
「それで？」

そんな楠さんを彼女は上目づかいで覗き込むようにして、ご機嫌を伺うように聞かえした。

「『それで？』って？」

「それで、どうやったら、こんな結果になるんですか？」

楠さんの声はあくまでも冷淡だ。

「えーと……くーちゃん。ひよつとして…怒ってる？」

「怒ってないですよ、別に。」

「怒ってるでしょ？本当は私に怒ってるんでしょ？」

「怒ってないですよ。怒ってないですから先輩、何故こんな結果になったのか教えてくださいよ。」

「ほら、怒ってるじゃん。だって声が怒ってるもん。」

「怒ってないですから、とりあえず教えてください。」

「もう、そんな怒らないでよ。怒ってないとか言いながら声が怒ってるじゃん！まるで私が悪いみたいじゃん！さっきから私は悪く無いって言うてるでしょ！」

楠さんはハアアアアと一つ深いため息をついて脱力してしまった。

すぐ隣にいた俺には、楠さんが小さくつぶやく声が聞こえていた。

『マツタク イツモイツモイツモイツモ』

それから楠さんは改めて気を取り直したようだ。

につこりと、少し引きつった笑いを浮かべながら再び先輩に問いかけた。

「ねえ先輩」

楠さんの笑顔につられたのか、何も考えてないのか、先輩もにつこり笑って答える。

「なに？くーちゃん？」

「先輩の足元に転がってる『物』は何ですか？」

先輩は自分の足元を見る。

足元に転がっているいくつかの『物』の中で一番近くにある『物』をローファアの先でつんと突つく。

それが何なのか改めて確認しているようだ。

それから先輩は天真爛漫、顔いっぱいに笑みを浮かべながら元気に答えた。

「えーと、右手！」

その答えを聞いた楠さんは、また怖い程の無表情に逆戻りする。

楠さんの体から、冷たい冷氣のような物が漂っている感じさえする。しかし先輩は、そんな楠さんの変化にまったく気づいていないらしい。

足元に転がっている『物』をまたつんとローファアの先で突きながら言った。

「あ、ごめん間違えた！これって左手だった！」

楠さんは、隣にいる俺だけが解かるくらいに小さくだけど、ワナワナと全身が小刻みに震えていた。

「いや、そーゆー具体的な部位の話で、無くてですね。」

「ん？この手の事じゃなくて、こっちの……」

先輩はまた別の『物』をローファアの先で突つく。

今度は突つくだけではなくて、ゴンッと蹴って、ゴロリと転がして見る。

それからまた天真爛漫、顔いっぱいに子供の様な笑顔を浮かべてこう言った。

「こっちの、頭の事？」

「そうじゃなくって……なんで、…なんで、交渉に当たったはずの相手が死体になってるんですか？」

楠さんは先輩の足元を指差しながら聞いた。

ワナワナと震える楠さんの全身の震えは、一言一言話すことに少しずつ大きくなっている。

「しかも8体も死体があるって、どういう事なんですか？私にも解かるように1からちゃんと説明してくださいよ。」

「私は悪くないよ。本当だよ。だって、こいつ等が、ごねるんだもん！あんな良い条件で交渉してるのにごねるんだもん！だから だから…」

「だから？」

「だから、めんどくさくなって、…」

先輩はピヨコツと舌を出して、ポコンと自分の頭を叩いて、かわいらしく言った。

「殺しちゃった エヘ」

血の海の真ん中で。バラバラに刻まれ累々とつまれる死体の山の真ん中で。

まだ生暖かい血が滴るナイフを片手に

返り血でぐずぐずに濡れた高校の制服のまま

先輩は天使の様に微笑んでいた。

「『殺しちゃった エヘ』ってかわらしく誤魔化そうとしても駄目ですよ！！なにやってるんですかー！！」

楠さんはブチ切れた。

クラス1いや学年1成績優秀。学校創立以来の才女。そう呼ばれていて、いつも冷静沈着で物静かな楠さん。

「め…め…めんどくさくなった…って、そんな理由で殺してしまつて、どうするんですかー！」

教室の後ろで難しそうな分厚いハードブックを読んでいる普段の楠さんからは、まったく想像できない光景だった。

「いつもいつもいつもいつも殺しちゃって、それで済むとおもって！！だから先輩は、奴らから『皆殺しのリリイ』って呼ばれるんですよ！」

「な！言ったわね！言っちゃってくれたわね、くーちゃん！私がそ

の呼ばれ方で呼ばれるの大嫌いなもの知ってて、言っちゃってくれたわね！」

「後先考えずに殺しちゃう先輩が悪いんでしょうが！これで何度めですか！この前の時だって10人も殺害してるんですよ。」

「10人じゃないもん。12人だもん。」

なぜか先輩は、腰に手を当ててエツヘンと自慢げだった。

「自慢してどうするんですか！そんなんだから『皆殺しのリリイ』って呼ばれ続けるんですよ！」

「あー！くーちゃんまた言った。二回も言った！酷い酷い！」

「ええ 言いましたよ。言いましたとも。お望みとあらば何度でも言っあげますよ、『皆殺しのリリイ』ってね！」

「あー もう！また言う！くーちゃんのいじめっこ！鬼！悪魔！冷血漢！」

「ふふん、好きにほざけばいいですよ。『皆殺しのリリイ』さん。」

「いじめっこ！ジャアニズム！サディスト！貧乳！加虐性欲者！嗜虐的関与者！」

楠さんの眼鏡のレンズが、ギラリと鈍く光る。

「ちよつと先輩」

楠さんが、また無表情に戻っていた。

無表情なのだが、さっきまでとは、また雰囲気がちがう。

明らかに、もう1レベルやばい段階に踏み込んでいる。

「今、先輩、さり気なく『貧乳』って言いませんでした？」

この楠さんのやばい変化には、さすがの先輩も気づいた様だ。

「言ってる、言ってるないよ。そんな事これっぽっちも言ってるないよ。」

先輩は首をプルプルと左右に振って否定する。

「今、言ったでしょ？『貧乳』って言ったでしょ？」

「言ってるないよ！くーちゃんの事をド貧乳とか、まな板とか、胸だけ少年ナイフとか、そんな事ちつとも言ってるないよ。」

先輩は、必死になって首を左右にぶんぶん振って否定する。



首を思いっきり振り回したせいで、血で塗れた長い髪が自分自身に絡みついてしまった。

先輩は髪を振りほどこうと、一人でジタバタとその場で暴れ出す。楠さんは、

「ちよつとばかり…、」

楠さんが、誰の目から見てもわかる程、全身をワナワナと震わしている。

「ちよつとばかりし自分の方が胸が膨らんでるからって偉そうにしてんじゃないわよ!!」

もーかんべんならんわ!この『ノータリンリリイ』が!!」

「あーそれだけは言わないって約束だったのに!言った!言っちやった!信じられない!くーちゃん信じらんない!!」

「えーい、うるさいわ!!この『ロリータ体型チチデカノータリンリリイ』が!」

「ひどーい!くーちゃんひどい!!壁みたいな胸してるくせに、くーちゃんひどーい!」

今度は先輩が、ブチキレル番だった。

なんと、先輩は足元にある右手いや左手を拾いあげて思いっきり振りかぶった。

「くーちゃんの、馬鹿ー!!」

誰の物とも解らない左手を、楠さんにめがけて投げつける。

「ええい!馬鹿なのは先輩でしょうが!」

飛んできた左手をさらりと交わす。

そして、なんと楠さんも自分の足元に転がっていた誰の物とも解からぬ左足を拾い上げ、力強く振りかぶったのだった。

「くらえ!この『デカチチニヨーブントラレマクリノータリンリリイ』!!」

思いっきり先輩に向けて投げつけた。

キヤーキヤーと叫びながら死体を投げ合う美少女二人。

あまりにもシュールな光景だった。

俺はその光景を、ただただ呆然と眺めていた。

「あ！」

先輩のあげた声で、俺はハッと気づいた。  
な、

生首が飛んでくる。

俺目掛けて、ものすごいスピードで生首が飛んでくる。

先輩が楠さんめがけて投げつけようとした生首が、血で手が滑ってしまい、俺に目掛けてなげてしまったのだ。

常人ではよけられない様な猛スピードで生首は飛んできた。

ガ！

人の頭って堅いんだよね…

そんな事を頭の片隅に思いながら、

生首に直撃された俺は、意識の闇へと落ちていった。

## 第2話 ムーン イズ ハッシュ ミストレス(前書き)

基本コメディですがたまに、残酷な表現があります。

## 第2話 ムーン イズ ハッシュ ミストレス

俺は、気がつく

帰宅するために、家に向かって歩いている途中だった。

な、なんだ？

おかしいぞ。おかしいだろう。

気がつくと、『家に向かって歩いている途中』っておかしいだろう。

でも、自分の事なのでまちがいが無い。気がついたら、確かに俺は、歩いている途中だったのだ。

それにしてもだな。

あんな気の失い方して、目が覚めたら歩いている途中っておかしいすぎるだろう。

あんな気の失い方して……あれ？変だ？どんな、気の失い方をしたんだ？

なんで、俺は気を失ったんだ？

頭に霧が被ったようにうまく思い出す事ができない。

道ばたで頭を抱えて、ついさっきの出来事を思い出そうとする。

少しだけ、少しだけ、思い出したぞ・・

いくつかのキーワードが頭に思い浮かぶ。

…デカチチ…ノータリン……貧乳…

うーむ、なんだか単に俺は欲求不満の変な奴みたいなキーワードだな。

なんだか思い出すのが嫌な気分になってきた。

そんな事を思っていたら、不意に思い出した。

あの光景を…

血の海の真ん中で。

バラバラに刻まれ累々とつまれる死体の山の真ん中で。

天使の様に微笑む先輩を

『貧乳』と呼ばれて逆上する楠さんを

そして死体を投げ合う二人のシニールな光景を

「楠さん」

俺が声をかけると彼女は本から顔を上げた。

「はい？」

まるで何事も無かったかのような平穩そのものな表情だ。

次の日の朝

俺は登校するとすぐさま、クラスが一番後ろの席にいる楠さんに声をかけた。

楠さんはいつもどおりに誰よりも早く登校してきていた。

朝の光が差し込む明るい教室で、いつもどおりに静かに分厚いハードブックの小説を読んでいる。

こっそりと本の題名を盗み見ると『月は無慈悲な夜の女王』と言う題名だ。

どんな内容の話なのか想像もつかない。

とにかく難しそうな本ではあるが、とりあえずは今は、本の内容は関係無い。

「昨日の事なんだけど」

「昨日のことって？」

そう言っただけで楠さんは少しだけ首を傾げて、眼鏡の奥から俺をのぞき込む。

楠さんの口元にはやさしい微笑が、自然に浮かんでいる。

楠さんはまったく動じた様子はない。普通に世間話をしている感じだ。

昨日の出来事は、俺の夢か、はたまた妄想だったのだろうか？普通に考えれば、あんな事が起こるはずが無い。なんだか不安になってくる。

でも、

確かに、あの光景だけは俺の脳裏に焼き付いているのだ。

俺は気を取りなして聞いてみる。

「昨日のあの死体の事なんだけど…」

気のせいかも知れないが

楠さんの眼鏡が、ギリリと鈍く光った気がする。

「死体？」

「昨日、先輩が殺したグゲツキイ！！」

俺は思わず奇声をあげていた。

楠さんの肘打ちが、みぞおちにクリティカルヒットしたのだ。周りからは、俺の体が影になって見えない絶妙な角度だった。

俺が急に奇声をあげたようにしか、周りの人間には見えなかっただろう。

「どうしたの？急に発情期のオオアリクイみたいな奇声をあげて？」しれっと、楠さんが聞いてきた。

俺は反論しようと試みるけど、ゼハゼハと変な呼吸を繰り返すだけだ。

あまりにも見事な肘打ちをみぞおちに喰らったせいで、まともに呼吸もできない。

「大丈夫？え？お腹が痛いのか？それは大変！すぐに保健室に行かないといけないわね。ちょうどいいわ、私保険委員なのよ。連れて行ってあげるわね。」

ものすごく説明的なセリフを、誰に言うとも無く言ってから立ち上がる。

そして楠さんは俺の手をつかんで無理矢理に廊下にひっぱり出し

そうとする。

俺は訳が解からず、思わず足を踏ん張って抵抗してしまった。  
その瞬間

楠さんはさり気無く、俺の手首を捻り上げる。

！！！！

激痛が手首から頭のテッペンまで駆け抜ける。

楠さんは、手首の関節を極めたまま無理矢理にグイグイと俺を引っ  
ぱっていく。

アダダダダダダ

俺は

声にならない悲鳴をあげながら楠さんに必死についていくのがや  
つとだった。

### 第3話 アークサム メン

楠さんはサッサッと廊下を歩いていき、階段を下り保健室に向かう。

俺は手首の痛みに耐えながら、連行される犯罪者の様な気分で行く。

ちょうど生徒が登校してくる時間帯で、多くの知り合いともすれ違った。

楠さんは知り合いやクラスメイトにこやかに挨拶を交わしていき、俺は脂汗をたらしながらゼハゼハと荒い息をして、皆からは色んな意味で心配そうな視線を送られた。

保健室に入ると、楠さんはくるりと振るかえる。

「昨日の事、憶えてるの？」

赤いフレームの眼鏡の奥から、俺に問い掛けてきた。

俺はやつと解放された手首をさすりながら、楠さんの質問に答えようとする。

けど、やっぱりゼハゼハと息をするのがやつとだった。

そんな俺の様子をみると目の前にいた楠さんは、にっこりと笑って、一歩前進して俺に近づいてきた。

俺のすぐ目の前、鼻の頭が楠さんのおでこにふれそうな距離に近づいてくる。

な、なんだ？

あまりに距離が近すぎて、俺は動揺してしまう。

その瞬間

「ふっ！」

楠さんが気合い一閃

俺に腹に、今度は楠さんの拳がのめり込む。

一瞬息が止まる。



その後、痛みと共に今まで肺にたまっていた空気が一気に外に流れだしていった。

「いだだだだ。さつきから何するんだよ！」

俺が抗議の悲鳴をあげると、楠さんは眼鏡の奥で柔らかに微笑した。

「これで、話せるように様になったでしょ？」

楠さんの微笑があまりに素敵だったのと、そしてその微笑があまりにもすぐ目の前にありすぎたせいで、俺は次の言葉が出てこなかった。俺の抗議は、そこで尻すぼみで終わってしまった。

「さてと」

楠さんは一步下がって、普通の距離で俺に向き直り改めて質問をしてきた。

「昨日の事、覚えてるの？」

「あんな事が会って、忘れる訳無いだろう」

「どうやら、本当に憶えてるみたいね」

「だから、忘れるほうが変だって」

俺の返答に聞いて、楠さんは腕を組み、うぐぐむと悩みだす。

そして、そのまま少しの間、悩み続けてしまった。

俺は聞きたい事が山の様にあつた。

けど、悩んでる所を邪魔するのは悪い気がして、楠さんが悩み終わるのをとりあえず待つ事にした。

不意に楠さんがつぶやいた。

「とりあえず、もう1回やってみようかしら」

「もう1回？何を？」

俺の問いかけには耳も貸さず、楠さんはいきなり保健室のカーテンを締め出した。

朝の光は遮れ、室内が鬱そうと暗くなる。

「ちよつとこつちきて」

楠さんがベッドの横で手招きする。

俺は事態が解らず突っ立っただけだと、彼女は俺の手をひっぱ

りベッドの所へ連れて行く。

ボン、と俺を突き飛ばし無理矢理ベッドに放り込む。

そして保健室のドアの所までトコトコと歩いて行って

カチャリ

と 鍵をしめた。

なんだ？なんなんだ？

楠さんが、柔らかに笑う。

ゆっくりと、ベッドにいる俺に近づいてくる。

そして、

楠さんは、自分のセーラー服の胸元に手を入れながらささやく様に言った。

「見て…」

「え？そ それは？」

俺にはまったく事態が飲み込めない。

「いいから…見てほしいの…」

楠さんは、もうすでに俺のすぐ近くまで寄ってきていた。

俺の目の前には、

「何も言わずに……ただ見つめて…」

俺の目の前には、深紅のペンダントがユラユラと揺れている。

楠さんの胸元から取り出した、深紅のペンダントがユラユラと揺れている。

いつの間にかペンダントの揺れにあわせて俺の体も揺れていた。

少しずつ少しずつ意識が遠のいていく。

楠さんがブツブツと何かを囁いているのが聞こえるが、内容が聞き取れない。

俺の世界には、ただ深紅のペンダントがユラユラと揺れているだけだった。

パン！

目の前で楠さんが手を叩く。

俺はびっくりして飛び起きた。

あれ？

いつの間にか、少し眠ってしまっただようた。

俺のすぐ横で楠さんが優しく優しく微笑んでいた。

「もう、びっくりしたわよ。貴方ったら教室でお腹を押さえて急に倒れてしまっんですもの。とっても苦しんでいたから、とても心配だったのよ。でも、もう大丈夫よね？さっき薬も飲んだし、少し休んだものね。もう大丈夫でしょ？」

俺は寝起きの頭で少しボーとしながら答える。

「そうか、俺は教室でお腹がいたくなつて倒れちゃったのか。」

「うんうん、そうよ。それで私が保健室まで連れてきてあげたのよ。」

楠さんは、飛びつ切りの微笑みを浮かべている。

とてもうれしそうだ。色んな意味で。

「そうかー 倒れた俺を保健室まで っていうか！！さっきのペンダントは何なんだよ！？ついでに聞くけど昨日の死体も何なんだよ！！」

俺の質問に、さっきまでニコニコ笑っていた楠さんが急に無表情になる。

能面のような、怖いぐらいの無表情だ。

小さく小さくボソッと

『チッ メンドクサイヤローダナ』

と、呟いたのが聞こえた気がするが、気のせいだと信じたい。

## 第4話 ラン メロス

「どうやら、貴方は効果が出にくい体質みたいね」

楠さんは軽くため息をついてから、俺に向き直る。

「まあ、仕方無いわ。それで？どのくらい昨日の事は覚えてるの？」

楠さんの眼鏡のレンズがキラリと光る。

綺麗な顔には、もうまったく笑みは浮かんでいない。

かなり無表情に近い状態になってしまっている。

俺はそんな楠さんの雰囲気気後れしながらも、自分が覚えていた事を説明した。

死体の山、その中心で微笑む先輩、死体を投げ合う二人。

「二つほど気になる事があるんだけど、質問していいかしら？」

俺が話し終わると、楠さんが無表情に質問してきた。

もちろん俺に断れるハズもない。

「どんどん聞いてくれ」

「では、まず一つ目ね」

楠さんは、俺の目の前に人差し指を一本を突きつけてから話し出す。

「貴方の話を聞いていると、なぜか『あの事』が話に出てこないのよね。昨日のトラブルに巻き込まれるきっかけになった『あの事』は覚えていないの？」

なぬ？

楠さんの話を聞いて、俺の頭の中にはでっかいクエスチョンマークが浮かんできた。

そうだ、なぜ俺があんな状況の中にいたんだ？

何かしら、巻き込まれるきっかけがあったはずだ。

改めて思い出そうとしてみても、その部分が全く思い出せない。

「その表情から察すると、貴方はどうやら『あの事』は綺麗スッカリ、スッカラカンに忘れてるみたいね」

「うむ。確かになぜ巻き込まれたのか、その部分が完全に記憶から抜け落ちてるな」

俺の返答を聞くと、ほんのわずかだが楠さんの口元がニヤリと笑った。

ちよつと気になってきた。

いったい何があったんだ？

「俺が巻き込まれるきっかけになった『あの事』って何なんだ？」

「では、二つ目の質問ね」

俺の質問をあからさまに無視して、楠さんはピースの様に二本指を立て、顔の前に突きつけてきた。

「二つ目の質問は、それほどたいした意味は無いのよ。だから気にしてる訳じゃないの。ほんのちよつとだけ気にしてるだけなのよ。けっして深い意味は無いの。だからね、忘れてるなら忘れたままでもいいのよ。あくまでも確認のために聞くだけだから。けっして気にしてる訳じゃないのよ。その所は勘違いしないでね。」

妙に長い前置きをおいてから、赤いフレームの眼鏡をギリリと光らせて、

楠さんは本題にはいった。

「先輩が私に対して言った、罵倒の言葉は覚えてるの？」

『貧乳』

と、言う言葉がすぐさま頭に浮かんだ。

しかし、俺は喉まで出かかったその言葉をあわてて飲み込んだ。

その言葉をそのまま言ってしまったって、これ以上、自分の身を危険に晒すほど俺は愚か者でも無い。

「いや、なんだったかな？キヤーキヤー騒いで死体を投げ合ってたのは覚えてるけど、何を叫んでいたのかまでは、よく覚えてないな」

「それなら、それで問題ないわ」

俺の答えに、楠さんは満足そうに微笑んだ。

今度の微笑みは心からうれしそうな本物の微笑みに見えたのは、俺の気のせいでは無いだろう。

そして、今さら気づいたのだが：

楠さんは微笑むとむちやくちやに美人だな。

眼鏡の奥の少しきつめの瞳は知性的な光りを帯びている。ほっそりとした顎のラインなんかは有名な画家が描いた美人画のようだ。スタイルだって、ほっそりと痩せて手足がスラッと長くヨーロッパの雑誌のモデルのようだ。雪の様に白い肌がその細さをさらに強調している。静かに本を読んでいる姿などはまさに『アジアンビューティー』と言う見出しと共に雑誌に載っても不思議じゃないくらいだ。

まあ、性格の方には、かなり問題がありそうだが。

そこで始業を知らせるベルが鳴り響いた。

「あら、どうやらタイムオーバーね」

楠さんは、すっかりいつもの優等生な楠さんの表情になっていた。うつすらと優しそうな微笑を浮かべて、とても人当たりの良い話し方にもどっていた。

「まだ、ちょっと話したい事があるから続きは昼休みにしたいけど、いいかしら？」

俺もけっきょく聞きたい事は、殆ど聞けずじまいだ。もちろん異論は無い。

俺は肯定の意味でうなずいた。

「あ、まって。やっぱり続きは放課後でいいかしら？」

「俺は構わないけど、なんで放課後なんだ？」

「一応なんだけど、先輩にも相談しておかないと。相談してもだいたい口クでも無い事を言い出すだけで余計にめんどくさい事になる

だけ、なんだけどね。でもあの先輩、教えておかないとスネちゃうのよ。一度昼休みにでも話してくるわ」

楠さんは、肩をすくめて見せた。

「それじゃ、また放課後よろしくね。…えーと…」

そこで楠さんは、言い淀む。

すぐく苦悩した表情が楠さんの顔に浮かんできた。

何を悩んでいるんだ？

「う、ごめんなさい。聞いてもいいかしら？」

楠さんは、ものすごく申し訳なさそうな表情をしている。

「何を？」

俺が聞き返すと、楠さんはおずおずと聞いてきた。

「貴方の名前なんだっけ？」

『ガーン！！』

頭の中で、昔の漫画風な擬音が鳴り響く。

そりゃーね！俺はクラスでも目立たない男ですよ！

今日まで一度もまともに、楠さんと話もしたこともないですよ！

楠さんみたいに有名じゃないですよ！

俺だってクラスメイトの名前を全部覚えてる訳じゃないですよ！

それでも　それでも！

やつぱりちよつとショックだ！

そんな心の叫びをかみ殺して、俺はなるべく平静を装って答えた。

「俺は津島、津島修治だよ。覚えていてくれよ」

「え？津島修治？本名なの？」

俺の名前になぜか楠さんは目を丸くして驚いている。

「もちろん本名だよ。嘘なんか言ってどうするんだよ」

「津島修治って…そんな名前の人がクラスにいるとは知らなかったわ。だって津島君って全然クラスで目立たないんですもの」

さりげなく心をえぐる事を言われて、かなり傷ついた。

しかし、それよりも気になったことがあった。

「楠さん。俺の名前を聞いて驚いてたみたいだけど、なんでだ？」

俺の質問に楠さんは、急に笑い出した。

何か笑いのツボにはいつたらしくてお腹を抱えて大笑いしている。

「何、笑ってるんだよ？」

「笑ったりして、ごめんなさい。でも、ひょっとして貴方、自分では気づいてないの？」

「何が？」

楠さんは、コホンとひとつ咳払いしてから、歌うように言った。

「真実とは決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。どうかわしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一にしてほしい」

??

「意味がわからん。」

楠さんは楽しそうにクスクスと笑う。

「話の続きは放課後ね。早く教室に行かないと、もう授業が始まるわよ、津島君」

そう言って、楠さんは軽やかな足取りで保健室から出て行った。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1834f/>

---

Wall Kill All

2010年10月10日15時36分発行